宇喜多秀家「八丈島物語」

第二回

講談師　一龍斎貞花

富と権力を得ながら、無念の最期を遂げた武将も少なくありません。

現代でも、○○天皇などと呼ばれた人が、逆境に会う人もいます。

しかし、人生の勝者と敗者は、最期の時の姿にありとも申せましょう。

「金右衛門、その方に秀家一つ頼みがある。関東へ酒を送ると聞いて凡夫の秀家酒が一口飲みとうなった。一椀振る舞うてくれまいか」

「これは、えらい頼みを受けたものだ。献上の酒手をつけたら半端物となって献上できなくなってしまう。お断り申そうか。……しかしながら世にある時は、備前岡山、作州津山の主で五大老の一人として飛ぶ鳥を落とす勢いのあった宇喜多公が、いかに世に捨てられしとは申しながら一椀の酒のご所望とはお労しい限りである。よし万一の時には切腹して申し開きするまでのこと。……何事かと存じましたら御酒のご所望、何でもないことしばしこの処にお待ち下さるよう、直ちにこれへ運びます」

一樽小船に積むと秀家の待つ浜辺へ。すでに陽はとっぷりと暮れ、皓皓たる中秋の名月が、浜辺に佇む秀家の姿をくっきりと照らしています。

鏡を開き、

「いざごゆるりと、お召し上がり下されますよう」

「忝いぞ金右衛門」

手にした生魚を砂地に置くと、酒樽へ近付き左手を樽の小べりにかけ、右手で柄杓を持ち今正に汲まんとして思わずのぞく樽の中。皓皓と照る月の光に映し出された己の姿を見て思わず顔をそむけた。

ややあって再び静かにのぞきこんだ秀家、

「顔の肉は落ち頬骨のみ高く、見るに甲斐なき秀家のこの姿、思い起せば三年（みとせ）前の八月十五夜の月は、太閤の築きし大坂城中にて烏帽子直垂の装束にて豪華な月見の宴（うたげ）であったしが、わずか三年後には変わり果てたる我が姿…。ア、いや思うまい昔を偲べば涙の種じゃ、忝いぞ金右衛門」

汲み上げた酒、さも旨そうに二杯、三杯のどを鳴らして飲み干したが、

「アーア甘露の味じゃ。三年振りに都の土を踏みし心地が致すわい。金右衛門今宵は一段とよい月じゃのう」

「仰せの通り近年にない名月にござります」

「都の空で見る月も、八丈の配所で見る月も、月に変わりはあるまいのう。

人はどん底に落ちると、自ら死を選ぶことも神仏を祈ることさえ忘れてしまう。いやできなくなってしまう。そちのお陰で名月に手を合わせ、人の心を取り戻すことが出来た。礼を申すぞ。その方になにか礼をしたいのじゃが見ての通りの有様じゃ。ウムこれこの生魚は今日一日掛りで捕えしもの。これをそちに遣わす。こりゃ世にある時の五百石と思うて受けてくりゃれ」

「ハイ、有難き幸せにございます」

「帰国致したなら正則殿に呉々も宜しく申したと伝えてくりゃれ。いつまでたてど名残りは尽きぬ、さらばじゃぞ金右衛門」

酒の酔（えい）を発っしてか一歩は高く、一歩は低くよろめく足を踏みしめながら、

手の平で調子を取りつつ猩々の謡を口ずさみながら山と山の間に姿が消えていきました。

怒り心頭　福島正則

「下郎面を上げい。献上の酒勝手気儘に手をつけたる由許しがたい不届きである。ナニッ豊臣の家に最も縁の深き方に頼まれたと、して何者じゃ」

「宇喜多秀家公にござります」

「デエッ」　驚いた正則、

「シテ秀家卿のご模様は、とく物語れ」

「されば申すも如何と存じますが、その昔鬼界が島の俊覚僧都も、これには過ぎまじと思われる痛しきお姿にございました」

「この正則が今日あるは故太閤のお陰である。その太閤のお身内にあたられる秀家公のご苦難を夢にだも知らざりしは、泉下におわす太閤に申し訳のないこと。その方ご酒を差し上げしをお喜びであったか。この正則に対しご伝言はなかったか」

「凡夫の秀家酒が飲みとうなった一椀振る舞いくれよとのお頼みに、即座に切腹の覚悟を致し快く一樽運び、月明りの浜辺に鏡を抜いて差し上げました

を、さも心地よげに召上り三年越しに都の土を踏みし思いが致すとお喜びになり、呉々も宜しく申したと伝えてくりゃれと繰返し、繰返しのお言葉でございました」

ジッと聞き入る正則の目からハラハラと流れる涙膝を濡らします。

「勝手な所業を致しました金右衛門、何分ともご処分を賜りますよう」

「咎めはせぬ、誉めてとらすぞ、秀家公によくぞ差し上げてくれた。正則この通り礼を申すぞ。大儀ながら今一度八丈へ参ってくれ。秀家公の衣服食糧船に積み大工も引連れて行け」

金右衛門再び八丈へと船を急がせます。

正則直ちに、駿府の家康の元へ使者を走らせ、

「八丈ヶ島の秀家公のご苦難見るに忍びず。即刻御赦免の御沙汰下さるか、島領付与の御計らいを賜りたい」と申入れ。

これに対し家康は、

〝豊臣譜代の福島が大義名分を旗印に事を起こしたなら、再び天下大乱の気運にもなるであろう。それを防ぐために〟と、「島領五百石を遣わすであろう」

秀忠は父の指図通り作事奉行柘植能登守に多くの大工、左官を八丈へ派遣。家は建てられ家族との再会の喜びに秀家の感激は一入であります。

秀家は、作業を終えた能登守に二通の書を託します。

福島に対しては、金右衛門より酒を恵まれた喜びと、正則の懇情に対し心より礼を申し述べてありました。

家康へは、島領付与のお礼と共に、普通の罪を犯した者も八丈へ送ってくれたならば、人の道を説き感化に努むることを余生の仕事にしたいと書き添えてありました。

「良きことを申してくれたな。宇喜多殿の力を借りて世道人心を導くことに致そう」

かくして政治犯のみならず一般の罪を犯した者も八丈送りとなりました。

送られて来た者に、秀家人の道を説き感化に努め仕事はしなければならぬことを教えるために開拓事業を起し、悪心が直れば便船を求めて、江戸将軍に宛てて改心状をつけて送り返してやる。

元の家来も、秀家健在を聞いて島へ渡ってくる者も多くあり、秀家の徳になついて居つく人もあり島は次第に栄えて参ります。

流人に対し表立っての送り物は出来ないものの、前田家は利家の娘豪姫と結婚した秀家のためにひそかに衣服、食糧、薬などを送り続け、明治になって宇喜多一族の流罪が解かれ東京へ帰るや、板橋の下屋敷の土地を与え、暮しを援助するなど三百年後まで支援、これは中々出来ることではありません。

秀家は、晩年和歌を詠み釣りを楽しみ八十三歳まで永生きをして、今なお残るその墓は宗福寺に丈余の蘇鉄に囲まれた五輪の塔。板橋の東光寺にもお墓がございます。

犯罪者はとも角、政変によって流された地位の高い人は一人で流されることなく、家族や家来など世話する者が同行しているが、独裁者だった人ほど耐えられず失意のまま死去している。

自分の身や家を顧みることなく時の権力に断然交渉をして秀家の危急を救った福島の家は間もなく断絶したが、宇喜多の家は連綿として続いています。

豊臣、徳川の天下大勢を決しました関ケ原合戦にまつわります、八丈、島物語の一席。パパンパン